
僕の一日

てるり

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

僕の日

【コード】

N6306A

【作者名】

てるり

【あらすじ】

僕は犬だ。朝は腹時計で起きる。さて、エサを貰うのに起こすのは・・・？

「僕の日」

僕は犬だ。名前は一応ある。ジローだ。僕が子供の頃、パパさんが鶴の一声で決めた。どうしてジローなのか、僕にはよくわからない。たぶん、誰も知らない。誰も聞かないから。

僕に親はいない。わからない。たくさん犬がいるところから僕だけ運ばれて僕の居場所が出来た。僕は手違いで引き取られた。でも、とりかえられる事はなかった。

それから、十年間生きてきて年もとった。いまじゃ十年じゃ長生きとは言われない。でも命が延びた分だけ、人と同じようになった。病気もしてるし、手術もしたこともある。年のせいか、運動が億劫で最近太った。

病院の先生に怒られて、僕を散歩に連れて行くお姉さんは僕にダイエツトさせようと頑張っている。余計なことを言う先生だ。

そんな僕の一日は腹時計から始まる。それが朝の四時か、五時か、六時か僕にもわからない。大事な的是お腹がすいているということだ。

ベロツ

「ジロー、わかったから、なめるな。」

もそもそとパパさんが動いた。

起こすには、起きるまでなめるか、体ごと、体当たりして起こすに限る。パパさんがママさんに言って、ご飯をくれるのはママさんだ。日曜日はパパさん。日曜のママさんは起こしても布団にもぐってしまふ。ママさんは朝から僕のご飯に薬を入れる。僕の課題はそれを避ける努力をすることだ。あんまりお腹がすいていると食べてしまっけど。

本当はご飯が好きだけど、なぜか僕のご飯は味が薄い。それでも

いっぱい食べられるから、他のものをねだるのは食べ終わってからにしている。

そのあとは外の鑑賞。起こすのはパパさんからに限る。外に出してくれるのは、パパさんだ。朝からベランダで外を見るのが日課だ。夏は暑いから 出ないけど。夏は玄関の方が冷たい。パパさんが再びドアを開けたときに入らないと忘れられてしまうので気をつけている。

そのうち、パパさんは出かける用意をし始める。

廊下を見つめると、廊下の向こうはお姉さんの部屋だ。お姉さんは起こすと怖い。でもママさんの声には起きる。

「起きなさい。」

お姉さんより、ママさんのほうが怖い。

みんなはパパさんを送り出す。僕は僕を置いて去っていく人に興味はない。

そして、準備が出来たお姉さんが僕を散歩に連れて行くのだ。

扉をひらけば前にも扉が見える。その前を通って階段を降りていく。はつきり言って年をとった僕の足の関節にはよくない。ジエツトコースター並に急な階段だ。

「いい天気だねえ。」

お姉さんが言った。

僕には天気はどうでもいい。雨や雪だと散歩に行けないというだけの話だ。

僕には気温の方が問題だ。暑過ぎると毛だらけの僕だつて暑くて日射病になる。ついでにコンクリートの熱さで足の裏をやけどしてしまう。

他にも風が強いと砂のある公園には連れて行ってもらえない。

今日もいつもの散歩道を歩く。歩く道は毎日変わる。たまに僕の希望が聞いてもらえる。気をつけないと僕はたまに足を踏み外す。これも絶対に老化のせいだ。

気になるものがあるとき見えてしまう。首についている紐が伸び

きつてやつと動く。お姉さんはせつかちだ。

久々に来た、池のある公園の斜めの草むらにはへびがいた。

「こんなところにへびは珍しい。」

お姉さんが言う。

僕には何かがガサガサ動いているだけにしか見えないので怖い。

カエルは平気だ。この間、動かないカエルがいた。お姉さんが僕を見ていないすきをねらって、気になって突っついてみた。お姉さんが慌てて僕をカエルの側から離れた。でも生きていなかった。カエルは息絶えていた。散歩の途中で戻れなくなったようだ。

このまま道の真ん中に置いておくと誰かに踏まれるからとお姉さんはカエルを持ち上げて草むらの方によけた。

散歩は八百屋を通り過ぎて公園を過ぎて橋を渡って神社の前を通って緑化指定地域を過ぎていく。

たくさんの人が通る。自転車も通る。車も通る。耳を澄ませていないと危険だ。でもずっと集中は出来ない。たまに自転車の前に出てひかれそうになる。なんで、こんなに人がいるんだろう。お姉さんにもお気をつけてないとたまに僕を蹴る。

「前に出てこないですよ。」

なんで、僕の方が怒られるんだろう。

最近、耳が遠い。これも老化だろうか。おかげで昔よりかはよく寝られるようになった。耳やあごをつけて寝ない犬は一匹しか知らない。有名なキャラクターになっている。

向こうから知っている犬がやってくる。いつも僕にほえる奴だ。売られた喧嘩は買う。お姉さんは怒るけど。自分より小さかったり、子供だったら気にしないことが多いけど、気に入らないのが二匹いる。ただ、合わないのだ。

家の前には何匹かネコがいる。一体、どのくらいの数がいるのかよくわからない。そして、今日もどこかの家のおばあさんがエサを与えている。

エサをもらっている黒いネコには一度、小さい頃に鼻を引っかか

れて以来、近づかないことにしている。ネコの手は怖い。ネコは気になるけど、僕と友達になっってくれる気はないらしい。

「こんにちは。」

「こんにちは。」

僕の頭上で挨拶が交される。場合によってはしばらくここにいるはめになる。今日は挨拶だけで終わったようだ。

家の前に来ると帰る気が失せる。この長い、足の半分近くある階段を上っていくのがダルイ。はつきりいって辛い。もう駆け上る体力もない。嬉しいことでも待っているなら別だけど。

こうして朝の散歩は終わる。

でかける人はほつといて、でかけないお姉さんにぴったりくっついておく。いなくならないように。気をつける瞬間は何かを押してうるさい箱から音がしなくなるときだ。昼寝をするか、でかけるか、お姉さんの部屋に戻るときにはかならず消える。逆を言えば、音がしている間はそんなに 見張っていなくても大丈夫なのだ。

目を離すといつの間にかドアが音を立てる。気がついて、慌ててドアの方に行くともういない。すぐに帰ってくることも、しばらく帰ってこないこともある。家に一人でいるのはあまり好きじゃない。お姉さんがいてもあまり構ってくれないんでそんなに変化はないんだけど。気分の問題だ。昼はひたすら寝る。

家にいるとたくさん音がする。

僕が洗われる場所の近くの物の音は順番が決まっている。僕に被害はない。

嫌いなものもある。廊下にいる機械だ。誰だつて体と同じようなサイズのものに毛を吸いとられそうになったら怖いはずだ。

一番びっくりするのは突然鳴る小さな機械だ。寝ているときに鳴ると心臓が悪い。それにはお姉さんもびくつとしようだ。それでも定期的にみている。

家の中はたくさん音が溢れている。

夕食はびつたり六時。僕の腹時計は五時から鳴りっぱなしだけど。

どんなに催促しても誰もくれない。僕に弱いパパさんでもママさんには弱い。催促をあきらめた頃に「ご飯の時間になる。」

夕方にもまた階段を下りて出かける。朝とはまた違う道だ。最近では遠くまで出かけたくないけど外が好き。でもお姉さんはあまり外でじっとしているのが好きではないようだ。虫に食べられてしまうかららしい。

「ジローちゃん。」

誰かが声をかけてきた。

僕の顔はなぜかみんなに覚えてもらいやすいようだ。でも、触られたくないんだけど。

僕に声をかけた知り合いのおばちゃんの犬はもういない。おばちゃんよりも年をとっていた。僕もこの十年でお姉さんより年をとっている。たぶん、そのうちパパさんよりも老人になるか、そのまゑに病気で死ぬかもしれない。

夕方にはママさんが帰ってくる。パパさんが帰ってくるのは一番嬉しい。甘えるとおやつをくれるからだ。パパさんが一番甘いことを僕は知っている。

人が増えるで見張っている必要がない。お姉さんの部屋で寝ている。この部屋が一番涼しい。ここか、玄関に限る。窓を開けても暑いと感じるようになったらクーラーを入れてくれるそうだ。僕は一番涼しい席を知っている。

ところで僕には疑問がある。どうしていつまでたっても僕の言葉が通じないのかということだ。同じように、いびきをたてながら寝るし、夢だつて見る。あくびもすれば、ため息だつてつく。

僕は単語くらいならいくつか覚えているというのに。みんなと僕の名前。ご飯とか散歩とか、僕に必要な単語たち。

それでも、みんなの会話の中に僕の名前が出て、僕のことをなにか話していて笑っていると、つい僕も笑ってしまう。

寝るときはパパさんの布団の近く。口に古くなったセーターをくわえて口をもぐもぐさせながら寝る。これがないとなぜか眠れな

い。昔からのクセみたいなものか。

でも、夏は夜の間に、涼しい場所を求めて歩き回る。とりあえず、今のところはこの夏を越すことに専念しようと思う。

そして、また腹時計が僕を起こすのだ。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6306a/>

僕の一曰

2009年7月2日03時56分発行